Annual Bulletin of Institute of Psychological Studies,
Showa Women's University, 2018, Vol. 20, 25-34.

論　文

母親の分離不安と娘が捉える母娘関係の関連性
― 世代間伝達に着目して ―

花井　里子・藤崎　春代

Mother's separation anxiety and the mother-daughter relationship from the daughters perspective: Focusing on intergenerational transmission

Satoko HANAI and Haruyo FUJISAKI

The mother-daughter relationship between middle-aged mothers and daughters entering adulthood was investigated. A questionnaire survey was conducted with female university students(G3) and their mothers(G2), to examine the mother-daughter relationship from the daughters' perspective and mothers' separation anxiety to daughters. Another questionnaire survey was conducted with G2 about their relationship with their mothers(G1), to examine intergenerational change and transmission of mother-daughter relationships and mother's separation anxiety to the next generation.

Comparing G3 to G2, G3 indicated increased receptivity, increased trust, and increased obedience to mothers. Moreover, mothers' separation anxiety from daughters seems to be intergeneration relative through the cognition of G2. Mothers with mother's separation anxiety scores about their daughters that did not match mother's separation anxiety scores from their mothers account for 1/3 of all mothers（G2), and there was no intergenerational transmission between these mothers.

Key words : mother-daughter relationships（母娘関係）, mother's separation anxiety（母親の分離不安）
intergenerational change（世代間変化）, intergenerational transmission（世代間伝達）

問題と目的

親子関係に関する研究は、子どものパーソナリティの形成や社会化と親の養育態度や養育行動との関連性を検討することに主眼が置かれてきた（小口, 1991；森下, 1978；桜井, 1988；塩田, 1956）が、近年では親子は相互に作用しながら変化していくものとして「親になる」ことによる親の側の変化に着目した研究も多い。特に乳幼児期の子どもをもつ母親の育児不安や育児ストレスなど育児に関するネガティブな感情構造と社会的要因について、主な養育者である母親を対象に多くの研究が行われている（岩田, 1994；数井・無藤・園田, 1996；牧野, 1982；牧野・中西, 1985）。一方、親の側の変化を生涯発達の視点から「親としての発達」として検討する研究も多い（柏木・若松, 1994；小野寺, 2003；高橋・高橋, 2009；徳田, 2004）。つまり、「親になる」ことは、育児不安などのネガティブな感情が生じる側面と「親としての発達」としてのポジティブな側面の両方を含むものであるといえる。このように親子関係は親子が相互に作用しながら長期にわたって変化し続けるものであるが、子どもが成長して親から独立する青年期となると、中年期である親の側は親役割から脱却していく。子どもが青年期、親が中年期のこの時期は子の精神的自立と親のアイデンティティの再構築が相互に関連して、親子関係が再構築される重要な時期である（福島, 1993；兼田・岡本, 2007；清水, 2004）。

女子は、精神的自立のプロセスにおいて母親と

の信頼関係を軸として自己の確立にいたる傾向にあり（福島，1992）、青年期の娘にとって母親との相互関連性は強いと考えられる。特に近年の我が国において母と娘はますますお互いの距離を縮めている（柏木，1998）。この時期の母娘関係に関する研究は多い（北村・無籐，2001；北村・無籐，2003；高木・柏木，2000；北村，2008）。さらに、母娘の親密な関係は生涯にわたって続くことが指摘されている（Chodorow, 1978 大塚他訳，1981；Fischer, 1986）。成人期以降の母娘関係についても着目することが必要である。例えば、母親である中年期女性にとっては高齢となった自身の親との関係も変化する時期である。上（自身の親）と下（自身の娘）いずれの親子関係においても変化が著しい（久和・梁，2006）。本研究では、中年期女性を核としてその娘と母親の両方を含めた母娘関係に着目し、母親の分離不安と娘が捉える母娘関係の関連性を検討する。

分離不安は、もともと、母子関係において子ども側が母親と離れることを恐れる心理として、子どもの発達の観点から捉えられるものであるが、近年、生涯発達の視点から親の発達として、母親の分離不安が注目されるようになった。「母親の分離不安」は子どもを残していくことについて母親の側に生じるさびしさや心配、罪悪感といった不快な感情状態と定義される（Hock, McBride, &Gnezda, 1989）が、精神的自立をしようとしている青年期の子どもに対しても同じような感情が生じる（林，2005）。距離を縮めている現在の母娘関係において、母親の分離不安は母親側の心理として大きく作用するものと考えられる。よって、本研究では、林（2005）が自我機能の視点から作成した「母親の分離不安尺度」を参考にして母親の分離不安尺度を作成する。一方、娘が捉える母娘関係の測定にあたっては、母親の分離不安との関連性を検討するため、親からの分離・独立といった側面も捉えたいと考える。三砂・竹原・嶋根・野村（2006）の「母娘関係尺度」は「親密」「支配」「受容」「服従」の4つの下位尺度から構成され、母娘の共依存関係を尺度得点に反映させることが可能であると考えられる。また、大家（2006）の「親子関係イメージ質問紙」は「分離・独立後における親の存在に対する受容・承認」「親との一体感・親への依存」「親に対する両価値的葛藤」「親との分離・親からの独立」の4因子が抽出されており、青年期の子どもが抱く親子関係イメージを捉えることができると考えられる。よって、本研究ではこれら2つの尺度を参考にして母娘関係尺度を作成する。

母親の分離不安については、水本（2010）においてその世代間伝達が検証されている。早期の愛着経験が個人に内在化され、それがその後の対人関係のモデルとして一貫した機能を果たし続け、子どもの時に愛着対象に抱いた感覚が大人になってからも様々な影響を及ぼすことがわかっている（遠藤，1992）。この愛着理論によると、児童虐待の世代間伝達は、親と子どもの内的ワーキングモデルによって仲介される（今野，2001）。また、養育者と子どもの「育てる－育てられる」という関係は、世代から世代へと引き継がれリサイクルしていく性質のものである。「育てる者」である養育者は、かつては一世代前の「育てる者」によって「育てられる者」であった。一方では自分の親への、他方ではわが子への二重の同一化を生み出し、さらにこの同一化が世代から世代へリサイクルしているのである（鯨岡，2002）。水本（2010）では、母親の内面で、過去における「娘としての自分」の現在の自身の「娘」への投影同一化と、過去における「自身の母親」の現在の「母親としての自分」への取り入れ同一化の2つの同一化が生じることで、娘に向ける分離不安が世代間伝達されることが示された。そうであるなら、この2つの同一化が生じなければ、母親の分離不安の世代間伝達が抑えられると考えられる。

本研究では、青年期にある女子大学生（以下G3）とその母親（以下G2）を調査対象として、中年期女性であるG2を中心に母親の母親（以下G1）も含めて3世代について、母親が娘に抱く分離不安（以下、母親の分離不安と表記）と娘の捉える母娘関係の関連性を検討することを第1の目的とする。そして母親の分離不安が世代間伝達することが先行研究によって示されているが、母親の分離不安が世代間伝達されない母娘関係の特徴を検討することを第2の目的としたい。現代の母娘関係の特徴を明らかにすることは母娘関係についての臨床的課題に繋がる意義があると考える。なお、母娘関係の世代間比較を行うためG2に対してG1についての質問への回答も求めることと

する。仮説は次の通りである。

①**母娘関係の世代間変化**：母娘関係は時代とともに変化しており、近年の我が国では母娘関係が親密化していると言われている。G3とG2との母娘関係はG2が20歳だった頃のG1との母娘関係と比べて親密性が高いと考えられる。

②**母親の分離不安と娘の捉える母娘関係の関連性**：母親の分離不安と娘の捉える母娘関係には関連性があるだろう。母親の分離不安が、娘が母親に対して抱く服従の思いや被支配感を高め、母親からの分離・独立の思いを抑制することが予測される。

③**母親の分離不安の世代間伝達**：①の仮説が検証されるのであれば、娘が捉える母娘関係の世代間変化にかかわるG1の分離不安が世代間伝達されていないG2の存在が予測される。特に過去にG1から向けられた分離不安が高かったが、現在G2自身がG3に向ける分離不安は低いG2が存在すると仮説を立てる。

方　法

調査対象者、調査時期、調査方法：2015年5月～6月、東京都内の女子大学及び大学院に通う学生（G3）とその母親（G2）に質問紙調査を実施した。学生300名に学生自身と母親用の質問紙のセットを集団配布した。その際、ID番号を記載して女子大学生とその母親をマッチングできるよう考慮し、母親には返却用封筒を用意して配布後1週間で郵送返却するよう依頼した。

分析対象者：G3とG2両方から回収できた120組（40.0％）を分析対象とした。G3の年齢は18歳から24歳で平均18.91歳（$SD = 1.31$）、G2の年齢は41歳から63歳で平均49.90歳（$SD = 3.84$）であった。

質問紙の構成：［G3用質問紙］　①表紙：調査内容に関する説明、調査倫理に関わる事項、研究結果の開示、およびID番号を記載した。②フェイスシート：学年と年齢　③G3に対するG2の分離不安：「母親の分離不安尺度」（林，2005）は4因子22項目からなる尺度であるが、一次元尺度を想定して林（2005）の項目から12項目を選び、本研究に沿うように修正した（5件法）。G2が自分に対して抱いているであろう分離不安について想像して答えるよう教示した。④現在のG3とG2の母娘関係：「親子関係イメージ質問紙」（大家，2006）は4因子18項目からなり、青年期の子どもが抱く親子関係イメージを捉えることができる因子が抽出されている。また、「母娘関係尺度」（三砂ら，2006）は4因子16項目からなり、「支配」因子と「服従」因子を含むことで母娘の共依存関係を反映させることが可能であると考えられる。この2つの尺度の項目を参考にして「信頼」「分離・独立」「依存」「服従」「受容」の5因子を想定して27項目を作成した。G2に対して抱いている思いを答えるよう教示した。

［G2用質問紙］　①表紙：調査内容に関する説明、調査倫理に関わる事項、回答期限、返送方法、研究結果の開示、および娘のものと同じID番号を記載した。②現在についてのフェイスシート：現在の年齢、就労状況　③現在のG2がG3に向ける母親の分離不安：G3用質問紙③の母親の分離不安尺度を「母」を「私」に、「私」を「娘」に変えて用いた。④G2が20歳の頃についてのフェイスシート：G2が20歳の頃の既婚・未婚、就職・未就職・在学中、G1の年齢、G1の就労状況　⑤G2が20歳の頃のG1がG2に向ける母親の分離不安：G3用質問紙③の母親の分離不安尺度を過去を回顧する形に変えて用いた。⑥G2が20歳の頃のG2とG1の母娘関係：G3用質問紙④の母娘関係尺度を過去を回顧する形に変えて用いた。

倫理的配慮：昭和女子大学倫理委員会心理学系倫理問題部会の承認を受けた（承認番号2014-6号）。

結　果

（1）分離不安尺度

母親の分離不安については、G2自身が回答したG2がG3に向ける分離不安（以下、G2→G3分離不安と略記する）、G3が捉えたG2がG3に向ける分離不安（以下、G2→G3分離不安と略記する）、G2が捉えたG2が20歳の頃のG1がG2に向ける分離不安（以下、G1→G2分離不安と略記する）の3種類を測定している。分離不安尺度の作成にあたって3種類の回答のうち、現在の自身の思いや態度について回答しているG2→G3分離不安の12項目について、主成分分析による解析を

行った。解析の結果、Table 1の9項目が一次元尺度であることが確認された。これを分離不安尺度として以下の分析に用いる。

G1→G2分離不安得点、G2→G3分離不安得点、G2→G3分離不安得点の平均値を算出し、対応のある3群間の平均値の差の検定を行った（Table 2）。G2→G3分離不安得点よりG2→G3分離不安得点が高いという結果からは、現在G2がG3に向ける分離不安についてはG2自身よりも娘であるG3の方が高く認知していることがわかる。

次にG1→G2分離不安得点、G2→G3分離不安得点、G2→G3分離不安得点の相関係数を算出した（Table 3）。G2が回答しているG1→G2とG2→G3に有意な相関が見られ、G2の認知を通して、母親から自分に向けられる分離不安と自分から娘に向ける分離不安に関連性が生じている可能性が示唆される。また、G2→G3とG2→G3にも弱い相関がみられ、G2、G3両者の捉え方に関連性があることが示唆される。

Table 1　母親の分離不安尺度の主成分分析

項目	負荷量
娘を自分の一部分のように感じる	0.72
娘を私の理想どおりに育てたい	0.68
娘は、私の生きがいである	0.62
娘が私よりも友達を頼りにすることは、あまりいい気がしない	0.57
娘を自分の思いどおりにしたいと思うことは、親として当たり前と思う	0.56
娘には、いつまでも子どものままでいてほしい	0.56
娘が私の言うことに反抗すると、許せない気持ちになる	0.53
娘といるときが一番落ち着く	0.47
娘から母親として頼られたい	0.46
	固有値　3.03

Table 2　3種類の分離不安得点の平均値（*SD*）と分散分析の結果

G1→G2	G2→G3	G2→G3	*F*	多重比較
2.55（.774）	2.57（.574）	2.77（.579）	5.755*	G1→G2＜G2→G3* G2→G3＜G2→G3*

*p<.05

Table 3　3種類の分離不安得点間の相関

	G1→G2	G2→G3	G2→G3
G1→G2	1	.409**	.163
G2→G3		1	.189*
G2→G3			1

*p<.05,　**p<.01

(2) 母娘関係尺度

母娘関係については、G2が捉えた自身が20歳の頃のG1との母娘関係（以下、G2→G1母娘関係と略記する）と、G3が捉えたG2との母娘関係を（以下、G3→G2母娘関係と略記する）の2種類を測定している。母娘関係尺度を作成するにあたって、現在の思いについて回答しているG3→G2母娘関係の27項目について因子分析（主因子法）を行った。十分な負荷量を示さなかった項目を除いて主因子法・プロマックス回転による因子分析を繰り返した結果、19項目が十分な負荷量を示した。Table 4は最終的な因子パターンと各因子のα係数である。母娘関係尺度は3因子構造であることが確認され、第1因子（11項目）は「信頼・受容」と、第2因子（4項目）は「服従」と、第3因子（4項目）は「分離・独立」と命名した。

G2→G1、G3→G2それぞれについて、因子ごとの回答得点を加算して各因子の項目数で割った値を算出して各因子の因子得点とし、対応ある平均値の差の検定を行った（Table 5）。「信頼・受容」、「服従」については、G3→G2の方がG2→G1より高いという結果が得られ、世代間の違いが示唆された。

また、G2→G1母娘関係尺度の各因子得点とG3→G2母娘関係尺度の各因子得点の相関係数はTable 6に示すとおりである。母親に対する思いの中で、特に母親を信頼し、受容する思いは世代間で関連性があると考えられる。

Table 4　G3→G2母娘関係尺度の因子分析 結果

項目	因子1	因子2	因子3
第1因子　信頼・受容（α＝.87）			
母は私のことを信頼してくれている	**.72**	-.12	-.17
私が親になったら、母がしてくれたのと同じように子どもにしてあげたいと思う	**.70**	-.09	-.09
母は私の心の支えである	**.70**	.13	.07
どのようなことがあっても母は私の味方であると思う	**.69**	-.01	-.03
母の生き方を支持している	**.65**	-.14	.05
困ったときは母を頼りたくなる	**.6**	.32	-.12
どんな時でも、母に見捨てないでほしいと思う	**.6**	.18	-.08
母は私の考え方を尊重してくれていると感じる	**.57**	-.38	.06
自分の考え方とは違っても、母の考え方を認めている	**.57**	.07	.34
母のところへはいつでも帰れる気がする	**.54**	.04	-.08
母はいざというときには何をおいても私を助けようとしてくれるだろうと思う	**.50**	-.04	-.18
第2因子　服従（α＝.69）			
母の機嫌を見ながら行動することが多い	-.16	**.79**	.10
私は母の感情や言動を気にしている	.17	**.63**	.12
私は筋道が通らないことでも母の言いなりになることが多いと思う	-.04	**.58**	-.11
母に相談をせずには自分で決心できないことが多い	.14	**.44**	-18
第3因子　分離・独立（α＝.58）			
私には、母とは異なる独立した考えがあると思う	-.21	.01	**.60**
私の人生は母の人生とは別の独自のものであると思う	-.08	.09	**.58**
母と私とは互いに独立した関係であると思う	.05	-.07	**.46**
母のことを一人の人間として客観的に見ている	.24	-.05	**.42**

因子間相関	第1因子	第2因子	第3因子
第1因子	—	-.029	-.236
第2因子		—	-.065
第3因子			—

Table 5　G2→G1，G3→G2母娘関係尺度　因子得点の平均値（*SD*）及び差の検定

	G2→G1 平均値（*SD*）	G3→G2 平均値（*SD*）	*t* 値
信頼・受容	3.40 （.746）	4.05 （.624）	-8.468**
服従	2.31 （.873）	2.90 （.823）	-5.729**
分離・独立	3.71 （.657）	3.58 （.670）	1.705

**$p<.01$

Table 6　2つの母娘関係尺度の因子得点の相関係数

G2→G1 ＼ G3→G2	信頼・受容	服従	分離・独立
信頼・受容	.255**	-.093	.019
服従	-.052	.117	.052
分離・独立	-.064	-.106	.192*

*$p<.05$，**$p<.01$

（3）分離不安得点と母娘関係尺度因子得点の関連性

G1→G2、G2→G3、G2→G3の3種類の分離不安得点とG3→G2及び、G2→G1母娘関係尺度各因子得点の相関係数を算出し、Table 7に示す結果が得られた。

Table 3、Table 7よりG1→G2分離不安得点及びG2→G1母娘関係尺度各因子得点とG2→G3分離不安得点との関連性が示唆されたことから、G2→G3分離不安の要因を分析するため、G2→G3分離不安得点を従属変数とし、G1→G2分離不安得点、G2→G1母娘関係尺度の「信頼・受容」因子得点、服従因子得点、「分離・独立」因子得点を説明変数として、重回帰分析を行った（Figure 1）。G2がかつてG1から向けられた分離不安が大きかったと認知していること、G1との関係を「信頼・受容」的だったと思っていること、「分離・独立」的でなかったと思っていることが、現在の娘（G3）に向ける分離不安を大きくする要因となっている。

（4）G1→G2とG2→G3の分離不安得点の高低によるタイプ分類にもとづく検討

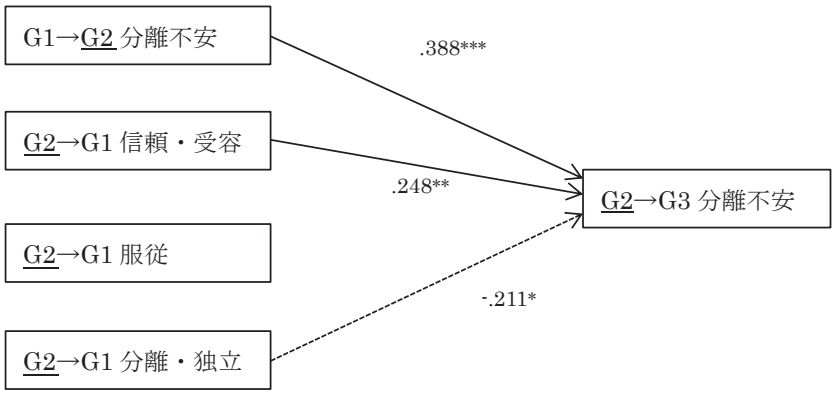
（3）までの分析から、G2→G3分離不安と、G1→G2分離不安、G2→G1母娘関係に相関がみられ、関連性、因果関係があることが示された。分離不安の世代間伝達がG2の認知の中で生じていることが示唆された。しかしながら、個々の対象者について検討するとG1→G2分離不安得点とG2→G3分離不安得点の高低が一致していない者がいるだろうという仮説③のもと、分離不安得点が3.0点より高いものを高群、3.0点以下を低群として、G2を4群に分けた。結果、G1→G2分離不安得点が高くG2→G3分離不安得点が高い群（以下、高→高群）は8名、G1→G2分離不安得点が高くG2→G3分離不安得点が低い群（以下、高→低群）は21名、G1→G2分離不安得点が低くG2→G3分離不安得点が高い群（以下、低→高群）は18名、G1→G2分離不安得点が低くG2→G3分離不安得点が低い群（以下、低→低群）は73名であった。高→高群、低→低群のように一致している群が81名（67.5％）、低→高群、高→低群のように一致していない群が39名（32.5％）で、G2の約1/3が自身が親（G1）から受けた分離不安の高低についての認知と自身が娘（G3）に抱く分離不安の高低についての認知が一致していないことが分かった。

次に、G2→G1母娘関係尺度の各因子得点について、4群間の平均値の差の検定を行った（Table 8）。低→高群の「分離・独立」因子得点は低→低群の「分離・独立」因子得点に比べて有意に低い。

Table 7　母親の分離不安得点と母娘関係尺度因子得点の相関

母娘関係 / 分離不安	G3→G2 信頼・受容	G3→G2 服従	G3→G2 分離・独立	G2→G1 信頼・受容	G2→G1 服従	G2→G1 分離・独立
G1→G2	.095	.087	.025	-.005	.595**	-.324**
G2→G3	.099	-.056	-.003	.271**	.209*	-.327**
G2→G3	.181*	.427**	-.201*	.050	.168	-.157

*p<.05,　**p<.01



*p<.05　**p<.01　***p<.001

Figure 1　重回帰分析

Table 8　G2→G1母娘関係尺度各因子得点の平均値（*SD*）の4群間の差の検定

	a 高→高 (n = 8)	b 高→低 (n = 21)	c 低→高 (n = 18)	d 低→低 (n = 73)	F 値	多重比較
信頼・受容	3.50 (.867)	3.08 (.749)	3.75 (.761)	3.39 (.702)	2.81*	b<c
服従	3.34 (.925)	3.11 (.793)	2.21 (.768)	1.99 (.674)	18.54**	a>c,a>d, b>c,b>d
分離・独立	3.47 (.725)	3.55 (.714)	3.38 (.551)	3.86 (.618)	3.95**	c<d

*p<.05,　**p<.01

考　察

母娘関係の世代間変化

娘が捉える母娘関係を測定する尺度について5因子を想定したが、因子分析の結果「信頼・受容」「服従」「分離・独立」の3因子が抽出された。3因子中、「信頼・受容」因子と「服従」因子において、得点平均値がG2→G1よりもG3→G2が有意に高かった。仮説①は支持された。近年の母娘関係の親密性が話題となっているが、本研究の結果からは、その親密性は母親を信頼・受容し、母親に対抗することなく服従するという特徴を読み取ることができる。一方、母親が娘に向ける分離不安に関しては、G2→G3分離不安得点がG1→G2分離不安得点、G2→G3分離不安得点と比較して、その平均値が有意に高い。G3はG2

自身の認知より、G2から向けられる分離不安を高く認知する傾向があることを示唆している。

母親の分離不安と母娘関係の関連性

G2の回答によるG1とG2の関係において、G1→G2分離不安得点とG2→G1「服従」因子得点の間に正の相関、G1→G2分離不安得点とG2→G1「分離・独立」因子得点の間に負の相関がみられた。G2はG1から向けられる分離不安を高く認知するほど、母親に服従し、分離・独立を認められていないと感じている。G3の回答によるG2とG3の関係においても、G2→G3分離不安得点とG3→G2「服従」因子得点の間に正の相関、G2→G3分離不安得点とG3→G2「分離・独立」因子得点の間に負の相関がみられ、仮説②は支持されたが、G2→G3分離不安得点とG3→G2「信頼・受容」因子得点との間にも弱いながら正の相関がみられる。G3は、母親から向けられる分離不安を自分に対する愛情として肯定的なものと認知している可能性が考えられる。現在の女子大学生は、母親の存在を受け入れて、信頼することで、母親との「仲良し母娘」の関係を築いている可能性がある。

母親の分離不安の世代間伝達

G2→G1母娘関係各因子得点は、G2→G3分離不安得点との間に相関がみられるが、G2→G3分離不安得点との間には相関がみられない。G2の認知を通して、G2がG1に対して抱く思いと、G3に向けられる分離不安との関連性が生じている。すなわち、G2の認知を通して、分離不安が世代間伝達されると考えられる。重回帰分析を行ったところ、G2が自身の母親から分離不安を多く向けられ、母親を信頼・受容していたと認知していることが、自身の娘に向ける分離不安を大きくする要因となることが示唆された。

本研究で分析した120名のG2のうち、G1からの分離不安を高く認知しているがG3に対する分離不安が低い高→低群が21名（17.5％）、G1からの分離不安を低く認知しているがG3に対する分離不安が高い低→高群が18名（15.0％）で、G1→G2とG2→G3の間で分離不安の高低が不一致のG2が存在する。このことから仮説③は支持された。分離不安の高低が不一致のG2においては分離不安が世代間伝達されていない可能性が考えられる。さらに、分離不安の不一致の要因として娘の捉える母娘関係の有様に着目した結果、低→低群と低→高群の差として「分離・独立」の高低が関係していた。これらの結果から母親の分離不安は単純に世代間伝達するものではなく娘としての母娘関係の捉え方による部分があることが示唆された。

今後の課題

本研究では、娘の側が20歳の頃の母娘関係の世代間変化について、G2の回答とG3の回答を比較して検討した。G2の回答は過去のことを回顧して答えたものであり、その回答には現在の年老いた母親（G1）との関係を反映することも考えられる。対象とする過去の時点とは違った評価が生じている可能性があり、現在のことを答えているG3の回答との同質性について検討する必要がある。現在20歳前後のG3が捉えるG2との母娘関係もG3が40～50歳になった時には変化が予想される。継続的研究によって、母娘関係の変化を検討していく必要がある。

本研究におけるG2世代は男女雇用機会均等法世代であり、この世代が青年期を過ごした時期は女性としての生き方の転換点にあたる。鯨岡（2002）でも、世代間リサイクルの概念図に社会的歴史的事象が影響を及ぼしていることが示されている。社会・文化環境の影響によるコホートの違いが世代間の回答の差に繋がった可能性も考えられる。その検証のためには、女性としての生き方に関する調査と合わせて検討することが必要であると考える。

本研究では、G1→G2とG2→G3の分離不安の高低が不一致のG2の中で低→高群については低→低群との違いとしてG1との母娘関係の捉え方との関連性が見られたが、高→低群と高→高群の違いについては母娘関係の捉え方との関連性は見い出せなかった。それ以外の要因、例えばG2の就労の有無との関係などについての検討が必要と考えられる。

付　記

本研究は、2015年度昭和女子大学大学院生活機構研究科に提出した修士論文の一部を修正したものです。

謝　辞

本研究にご協力いただきました方々にお礼申し上げます。

引用文献

Chodorow, N. (1978). *The Reproducton of Mothering: Psychoanalysis and the Sociology of Gender*. California: University of California Press.（チョドロウ，N.大塚光子・大内菅子（共訳）(1981). 母親業の再生産―性差別の心理・社会的基盤―　新曜社）

遠藤利彦（1992）．内的作業モデルと愛着の世代間伝達　東京大学教育学部紀要, *32*, 203-220.

Fischer, L. R. (1986). *Linked lives: Adult Daughters and Their Mothers*. New York, NY, US: Harper & Row Publishers.

福島朋子（1992）．思春期から成人にわたる心理的自立―自立尺度の作成及び発達的検討―　発達研究, *8*, 67-87.

福島朋子（1993）．自立に関する概念的考察―青年・成人及び女性を中心として―　発達研究, *9*, 73-85.

林　歩（2005）．自我機能の視点からみた母親の分離不安尺度の構成　心理臨床学研究, *23*, 54-63.

Hock, E., McBride, S., & Gnezda, M. T. (1989). Maternal separation anxiety: Mother-infant separation from the maternal perspective. *Child Development*, *60*, 793-802.

岩田美香（1994）．育児期の母親の心理および生活とソーシャル・ネットワークの活用　北海道大学教育学部紀要, *64*, 93-96.

兼田祐美・岡本祐子（2007）．ポスト子育て期女性のアイデンティティ再体制化に関する研究　広島大学心理学研究, *7*, 187-206.

柏木惠子（1998）．結婚・家族の心理学　ミネルヴァ書房

柏木惠子・若松素子（1994）．「親となる」ことによる人格発達：生涯発達的視点から親を研究する試み　発達心理学研究, *5*, 72-83.

数井みゆき・無藤　隆・園田菜摘（1996）．子どもの発達と母子関係・夫婦関係：幼児を持つ家族について　発達心理学研究, *7*, 31-40.

北村琴美・無藤　隆（2001）．成人の娘の心理的適応と母娘関係：娘の結婚・出産というライフイベントに着目して　発達心理学研究, *12*, 46-57.

北村琴美・無藤　隆（2003）．中年期女性が報告する娘との関係と心理的適応との関連　心理学研究, *74*, 9-18.

北村琴美（2008）．過去および現在の母娘関係と成人女性の心理的適応性―愛着感情と抑うつ傾向，自尊感情との関連―　心理学研究, *79*, 116-124.

今野義孝（2001）．わが子虐待の世代間伝達は断ち切れるか？―超早期における愛着形成を通して―　特殊教育学研究, *39*, 53-59.

久和佐枝子・梁　明玉（2006）．中年期女性の親子関係：サンドイッチ世代の２つの親子関係のための尺度開発　お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要, *3*, 131-140

鯨岡　峻（2002）．〈育てられる者〉から〈育てる者〉へ―関係発達の視点から―日本放送出版協会

牧野カツコ（1982）．乳幼児をもつ母親の生活と〈育児不安〉　家庭教育研究所紀要, *3*, 34-56.

牧野カツコ・中西雪夫（1985）．乳幼児を持つ母親の育児不安―父親の生活や意識と母親の育児不安との関連―　日本教育社会学会大会発表要旨集録, *37*, 36-37.

三砂ちづる・竹原健二・嶋根卓也・野村真利香（2006）．母娘関係尺度作成の試み　民族衛生, *72*, 153-159.

水本深喜（2010）．青年期から成人期への移行期における母娘関係の世代間変化と世代間伝達　家族心理学研究, *24*, 103-115.

森下正康（1978）．親の養育態度と子どものパーソナリティの発達に関する因子分析的研究　和歌山大学教育学部紀要　教育科学, *27*, 53-72.

小口孝司（1991）．母親の自己開示と養育態度が子どもの自己開示と学級集団への適応に及ぼす効果　社会心理学研究, *6*, 175-183.

小野寺敦子（2003）．親になることによる自己概念の変化　発達心理学研究, *14*, 180-190.

大家聡樹（2006）．青年期の親子関係イメージと境界例心性に関する研究　心理臨床学研究，*24*，22-33.
桜井茂男（1988）．内発的動機づけに及ぼす養育態度の影響　奈良教育大学教育研究紀要，*24*，77-82.
清水紀子（2004）．中年期の女性における子の巣立ちとアイデンティティ　発達心理学研究，*15*，52-64.
塩田芳久（1956）．親子の期待願望と子どものパーソナリティ　児童心理，1042-1049．金子書房
高木紀子・柏木惠子（2000）．母親と娘の関係―夫との関係を中心に―　発達研究，*15*，79-94.
高橋道子・高橋真実（2009）．親になることによる発達とそれに関わる要因　東京学芸大学紀要　総合教育科学系，*60*，209-218.
徳田治子（2004）．ナラティヴから捉える子育て期女性の意味づけ：生涯発達の視点から　発達心理学研究，*15*，1，13-26

はない　さとこ（昭和女子大学生活心理研究所特別研究員）
ふじさき　はるよ（昭和女子大学大学院生活機構研究科）